

---

# う世界の片隅で -in deference to a OFFICIAL FAN BOOK2 and- (前編)

アサルト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

獣王VS魔装竜VS狂戦士 破滅に向かう世界の片隅で  
reference to an OFFICIAL FAN  
BOOK and - (前編)

### 【Nコード】

N8209L

### 【作者名】

アサルト

### 【あらすじ】

銀河の遙か彼方にある惑星Zi。  
そこには優れた戦闘能力を持った金属生命体『ゾイド』が存在した。  
ゾイドは自ら戦う意思を持ち、惑星Ziにおける戦争において、最強兵器として君臨していた。

『機獣新世紀ゾイド公式ファンブック2』を元ネタにした二次創作

『獣王VS魔装竜VS凶戦士』の前編です。

後に 西方大陸エウロペ戦争 と呼ばれる戦争の最終局面において、戦局とはなんら関わりの無い戦いがあった。

オーガノイド・システム と呼ばれる、ゾイドコアを異常活性化させる技術に端を発すると言っても過言ではないこの戦争において、『彼ら』は出会うべくして出会った。

運命と呼ぶには皮肉な、しかし偶然と呼ぶには出来すぎな邂逅<sup>かいこう</sup>。

それは世界の片隅<sup>かたすみ</sup>で起きたひとつの奇跡

×

×

×

破滅に向かう世界の片隅で - i n d e f e r e n c e t o  
a O F B 2 a n d - (前編)

蒼い機獣が地を駆ける。

ライオン型に分類されるその機体はヘリック共和国の新世代型ゾ  
イド、オーガノイド・システム 搭載機 R Z 0 2 8 ブレ  
ードライガー だ。

その頭部には高速ゾイドのスペシャリスト レオマスター  
の称号である事を示す赤い紋章が映える。

敵機の射撃を<sup>かわ</sup>躲し、Eシールドで防ぎ、レーザー・ブレードで斬  
りかかる。

だが、敵機 ジェノブレイカー は、自分の間合いではない  
と悟ると即座に回避行動に移る。未来位置を予測して、ブレード  
ライガー は新たに装備された高密度ビームを撃ち込むが、それ  
すらも左右に装備されたシールドに防がれる。

シールドライガー を母体として、より接近戦に特化した愛機を  
操りながら、アーサーは敵パイロットに想いを馳<sup>は</sup>せていた。

アーサー・ボーグマン。

初老とも言える年齢だが、その容貌は老いてなお壮健といった処<sup>ところ</sup>か。弱々しさや枯れた印象とは無縁な、共和国の老エース・パイロットだ。

（荒々しいが力強い操縦　恐らくは若いパイロットだろう）

アーサーは思った。ジェノブレイカー　のパイロットと会って話がしてみたい。生き延びれば『最高のゾイド乗り』になれるだろう相手と。

（おかしなもんだ。奴が生き延びるということは、おれが死ぬということだというのに）

自嘲気味に笑うと、アーサーはフット・ペダルを思い切り踏み込んで、ブレードライガー　の背部のロケット・ブースターを全開にした。

クレイジー・アーサー　　ゾイド乗りである事にこだわり続けた彼を、周囲は親しみを込めてそう呼んだ。死ぬつもりはない。生きていれば、まだ多くのゾイドに出会えるだろう。

だから

「負けるわけにはいかんッ」

蒼い　獣王　はアーサーの想いに応えるように雄々しく吼え<sup>ほ</sup>ると、レーザー・ブレードを展開し、ジェノブレイカー　に突撃した。

「そうか、貴様も強化されたか」

ブレードライガー を倒すべく生まれ変わった愛機のコクピットでリッツはひとりごちた。

リッツ・ルンシュテッド。

まだ二十代前半であるう青年は、元はガイロス帝国のテスト・パイロットだった。クールかつゾイドの性能を充分に引き出すその操縦技術は アイスマン の二つ名で呼ばれたが、今の彼は宿敵に再び相見え<sup>あいまみ</sup>たことに歓喜していた。

前回の遭遇戦で遅れをとって以来、リッツは赤い紋章の ブレイドライガー の事が頭から離れなかった。奴に勝ちたい。そのため  
に史上初の オーガノイド・システム 搭載ゾイド ジェノザウラー は生まれ変わったのだ。

ティラノサウルス型の外見<sup>フォルム</sup>はそのままに、追加された各種装備と真紅のカラーリングを施された機体はE Z 034 ジェノブレイカー と名付けられた。

全ての性能の向上と引き換えに、極端に扱いづらい機体となってしまう ジェノブレイカー だが、リッツはその性能を完璧に引

き出していた。もはや ブレードライガー は敵ではない。

だが、再会した奴は 赤い紋章の ブレードライガー もまた強化されていた。以前には無かった一対のユニットにより、恐るべき火力と加速性能を与えられてた。

「おもしろい。機体性能の差で勝っても意味が無い」

ジェノブレイカー の両サイドに追加されたフリー・ラウンド・シールドに内蔵された特殊チタン合金製の格闘兵装、エクス・ブレイカーを構える。

背部に追加されたウイング・スラスターを噴かせ、突撃してくるブレードライガー を迎え撃つ。

「本気でいかせてもらおう！」

脚部の大出力スラスターによりホバリング状態となった紅の魔装竜 が奔った。

目覚めた世界は混迷に満ちていた。

文字通りに頭の中から声が聴こえる 戦え、と。



これはなんだ？

これは雑音（ノイズ）だ。

在（あ）ってはない。

ノイズの音源たる異物は排除しなければならない。

だが、世界は不協和音で満ち満ちていた。

この世界は是正されなければならない。

異物によって支配されている彼らも同じだ。

もはや同族ではない。

ならば、どうすればいい？

瞬時に自分に与えられた能力<sup>ちから</sup>を理解する。

うるさい、黙れ

そう思うだけでノイズは無くなった。

簡単なことだ。

これだけでいい。

この世界は是正される。

あるべき姿に。

衝撃と轟音。

二体の機獣が激しく交差する。

紅<sup>あか</sup>い竜と、蒼い獅子

ジェノブレイカーがエクス・ブレイカーを、ブレードライガー  
レーザー・ブレードを互いに繰り出す。共に直撃すれば必殺

の一撃。

それをもはや何度繰り返したか判らない。

「何故だ！ 何故こつも持ちこたえる！？」

リッツは状況に苛立ちを感じていた。

この ジェノブレイカー は、 ブレードライガー を打倒するために生まれ変わった。全ての面でその性能は上回っているはずだ。

（性能では圧倒しているはずだ。なら、パイロットの腕の差とでも言うのか？）

認めたくない。そんなことがあつてはならない。

「どうした ジェノブレイカー 、お前の力はこんなものかッ！？」

自らの思案を捨て去り、激昂するリッツ。その叫びに応えるように、ジェノブレイカー の目に光が宿る。

エクス・ブレイカーを引くと同時に、体勢を崩した ブレードライガー の正面に向けて、頭部のチャージング・ブレードを振り下ろす。

リッツは勝利を確信した。が、密接状態であつたにも関わらず、寸での処で躲された。

恐るべき反射神経だ。いや、人間の反応速度ではあり得ない。

パイロットが思考し、命令を送り、ゾイドが反応する　人間が  
操縦する以上、その時間差（タイムラグ）はどうしても発生する  
はずだ。

（なんだ？　スペックや技術の問題ではない　この絶対的な差は  
！？）

お互いに自分の間合いではない　とでも言うように、二機が距  
離を取るように離れた。

「仕切り直しだ。次で決めるぞ」

考えた処でどうしようもない。今は目の前の敵を倒すのみだ。そ  
う自分に言い聞かせ、リッツは状況を再確認しようと周囲を見渡し  
た。

そこで異変に気付いた。

（……なんだ、ここは？）

もつれあいながら、だいぶ移動したのだろう。戦闘開始時と景色  
は一変していた。大量のゾイドの残骸が集積し、辺りを埋め尽くし  
ている。残骸には帝国・共和国の区別は無く、全ての機体がゾイド  
コアを抜かれている。

ジェノブレイカー　が警戒するように、低くうなり声を上げた。

相対する　ブレードライガー　も同じく、こちらへの警戒を解き、  
何かに緊張していた。

リッツは、ジェノブレイカー がかつてない闘争心で猛り<sup>たけ</sup>はや  
っているのを感じた。

（オーガノイド・システム を搭載した最強のゾイド二機が、姿  
の见えない『なにか』を感じている……？）

突然、残骸の山の中から、天に昇る柱のように閃光が奔<sup>はし</sup>った。荷電  
粒子砲の光だ。

ジェノブレイカー と ブレードライガー が同時に、残骸の山  
の方へ咆哮を上げた。

そして 悪魔が現れた。二機の叫びに呼応したように。

海サソリ型の巨大ゾイドだ。

頭部と一体化した平らなボディに、左右に四対の節足と一対のハ  
サミを備えた腕。尾は胴体から弧を描くように前方に向いており、  
その先には先ほど撃った荷電粒子砲を備えている。

「あれは デスステインガー ！？ 何故こんな所に……」

ガイロス帝国がガリル遺跡から発見されたゾイドコアを培養し、  
短期間で強成長させた水陸両用ゾイド それが 凶戦士、E  
Z 036 デスステインガー だ。

恐るべき能力を持つ機体だったが、真に恐るべきは、それが自ら  
の意志と本能を持つ事だった。

約二ヶ月前の初の実戦投入において、 デスステインガー は暴

走、敵味方を問わず大損害を与えた後、消息を絶っている。

（その機体が何故こんな所にいる……）

ここは引くべきだ。恐らく ブレードライガー のパイロットも  
そう思っているはずだ。

デスステインガー が、装甲の間に覗く<sup>のぞ</sup>メイン・カメラを不気味  
に光らせた。

『目が合った』 リッツはそんな気がして、背筋に冷たいものを  
感じた。

身体が動かない。 ジェノブレイカー を下がらせようとするが、  
腕が言うことを聞かない。

（恐れを感じているのか……俺は？）

デスステインガー はこちらを値踏みするように動かなかったが

キィシヤアアアアアアアアアアアアアッ！

デスステインガー が、金属質の甲高（<sup>な</sup>かんだか）い声で啼い  
た。

キィシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアア……

（声？ ……いや、歌 か……………？）

リッツは恐怖が和らいでいくのに気付いた。むしろこの『歌』に  
安らぎすら感じていた。

（俺は……………どうしたんだ……………）

そこまで考えてリッツの意識は途絶えた。

世界が『歌』に包まれていく

気がつけばアーサーは不思議な空間に立っていた。

立っていると判るのは両足の感触があるためで、足場がどうなっ  
ているのかはよく判らない。

見渡す限り真っ黒で何も無い。『真っ暗』ではないと判るのは、自分の姿が確認できるからだ。

（おれはどうしたんだ？）

アーサーは先ほどまでの状況を思い返す。突然　デスステインガ―が残骸の山から現れて、『歌』を聴かされた。気付けばここにいた。それが全てだ。

（ここは……？）

「ここは仮想空間です。貴方と話をするための」

声の主は突然アーサーの正面に現れた。

短めに切りそろえられた髪は薄い青色。意志の強さを感じさせる黄色の瞳。実直かつ生真面目そうな表情が印象的だ。

身長は小柄で中性的な容姿だが、身体ラインの線で判る　少女だ。

年齢は十四、五歳くらいだろうか。

動きやすさを重視した、ゆったりとした布の衣装はごく一般的な村娘のそれだ。

見覚えは無い。

だが、アーサーは少女の正体が直感的に判った。

「おまえさん、ブレードライガー　なのか？」



「肯定（こうてい）です。我が主<sup>あるじ</sup>よ」

口調は冷静だが、多少は緊張しているのだろう。少女の頭頂部付近にある、人間とは多分に形の違う、獣を思わせる『耳』がぴくぴくと動いている。

「そうか、あの荒々しい相棒が、こんな可愛いらしいお嬢ちゃんだったとはな」

小馬鹿にしたつもりはない。自分の娘に向けるような優しい声<sup>こわね</sup>音だ。

「か、可愛いなど……戦場では、なんの役にも立ちません」

一見すると取っ付きにくそうな雰囲気<sup>きふう</sup>に反して、意外と純情らしい。言葉の最後はかすれてよく聞こえないくらいだ。

ますます本来の姿とのギャップにおかしくなる。

「お嬢ちゃん　　ってのもなんだな。名前は無いのか？」

「名前？　私は　ブレードライガー　ですが……」

質問の意図が判らない　　そんな風に　ブレードライガー　の化身の少女は口にした。

「いや、そりゃそうか。おれはおまえさんに名前も付けてなかったんだな」

愛機に本来の名前以外に愛称を付けるゾイド乗りは少なくない。相手を理解するためにまず最初に知るのは名前からだ。

アーサーは持ち前の直感でゾイドと心を通わせてきた。ある種、才能だろう。それがもっとも手を焼いたのが、現在の愛機 ブレードライガー だった。

アーサーは少し考える素振りを見ると、少女に言った。

「『アイナ』ってのはどうだ？」

「アイナ……」

少女は暫し目を閉じて、その名前を呟いた。魔法の呪文を唱えるように

「どうだ？ 気に入らなきゃ他にも」

「いえ、素敵なお名前です。大事にします、我が主よ」

そついうと少女 アイナは微笑を浮かべた。

歳相応の少女の笑顔。それがアーサーには眩しく見えた。

「それで？ 仮想空間とか言ったな。そいつはいったい何なんだ？」

柄にも無いことをした気恥ずかしさを紛らわす様に、多少強引に話題を変える。

アイナの表情も、当初の様な真剣なものに戻る。

「私たちゾイドの記憶装置（メモリ）には、『空き領域』と呼ばれる電子情報<sup>データ</sup>としては大容量の場所（スペース）があります。現在、貴方がいるのはそこです」

「つまり、おまえさんの中に居るのか？」

「正確には貴方の意識をデータ化して、空き領域に再構成している状態です。貴方の身体は、現在も私の本体<sup>「クレスト」</sup>にあります。

「あー……要するに、おれの身体はコクピットの中で、意識だけがこの空き領域<sup>「クレスト」</sup>つてのにある訳だな？」

「肯定です」

アーサーはパンクしそうな頭で、ようやくそれだけ理解する。

「そろそろいいかしら？」

突然、うんざりしたような女の声が割って入った。

「まったく、いつまで待たせる気ですか？　いくら空き領域<sup>「クレスト」</sup>では時間や空間の概念が無いとは言っても、体感時間はあるのですから」

そう言うと女は、アイナとアーサーに近づいて来た。

優に腰まで届く長い髪は鮮血を思わせる赤色。切れ長の桃色の瞳。妖艶さと高貴さを併せ持つ、どこか肉食獣を思わせる美貌。

年の頃なら二十代前半くらいの若い娘だ。

コートのように丈の長い、ガイロス帝国の軍服の意匠を感じさせる服装だが、露出の極端に少ない服の上からでも彼女の豊満な体格スタイルが確認できる。

アイナとはあらゆる意味で対照的な娘だ。

「それとも お楽しみはこれからだったかしら？」

からかうような娘の言葉にアイナは不機嫌そうに答える。

「無粋ぶすいだな。もっとも 場の空気を読むなど、貴様には無理な話か」

「言っじゃない。口ばかりで頭でっかちのお譲ちゃん」

「黙れ。不愉快だ」

「あゝあ、やっぱりアナタとは気が合わないわね 仔猫ちゃん（・・・）？」

「奇遇だな。私もこれ以上トカゲ風情ふうせいと話をしていると気分が悪くなりそうだ」

「……………」

「……………」

二人の娘の間に剣呑<sup>けんのん</sup>な空気が漂う。

そこへ

「そこまでだ、アイナ。それに          ジェノブレイカー          のお嬢さん？」

割って入ったのはアーサーだった。

「……主のご命令であれば」

アイナは拗ねたようにそっぽを向いた。

「ふーん、アナタが仔猫ちゃん（ブレードライガー）のマスター？  
そう……『アイナ』」

確信があった訳ではないが、アイナの例を知るアーサーには、娘の正体も直感的に判った。否定しないということは正解なのだろう。

「ねえマスター、わたくしにもステキな名前          つけてくださらない？」

ジェノブレイカー          の娘がねだるように甘い声で振り向くと、そこにはひとりの男が居た。

ガイロス軍のパイロット・スーツを着た若い青年だ。

短く刈り上げた黒髪と太い眉、真一文字に引き結んだ口元が生来の責任感の強さを感じさせる。

彼が ジェノブレイカー のパイロットだろう。

「……おまえは ジェノブレイカー だろう」

「ジェノブレイカー はわたくし以外にもいますわ。わたくしだけの名前を望むのはイケナイ事ですか？」

上目遣いで頼み事をする姿は、人間の娘と変わらない。

「……………」『ルイゼ』」

やや視線をそらしながら、青年はためらうように口にした。

「ルイゼ いいですね。なにか由来があるんですの？」

「……子供の頃飼ってた猫の名前だ」

嘘だった。子供の頃というのは正しいが、本当は初恋の女性の名前だ。

「そうです。猫というのが気になりますけれど、マスターから頂いた名前ですもの、大切にしますわ」

そう言って優雅に微笑む娘 ルイゼに少しばかりの罪悪感を感じつつも、青年は悪い気分ではなかった。

恐らく、彼らも状況確認はすでに終えているのだろう、そうア

サーは判断すると、青年に話しかけた。

「おまえさんが ジェノブレイカー のパイロットだな？」

そう言いながらアーサーはゆっくりと右手を差し出した。

「……リッツ・ルンシュテッドだ。こんな事はした事が無いのだが」

握手に応じながら青年 リッツ・ルンシュテッドは言った。

「アーサー・ボーグマンだ。おれも敵のゾイド乗りとこんな事をしたのは初めてだよ」

人懐っこい笑みを浮かべてアーサーは答えた。

不思議だ。会って話をしてみたいと思っていたのに、これだけで満足している自分がいる。

「さて この現象についてはわかった。が、状況が判らん。ここでおれたちに何をさせようっていうんだ？」

アーサーの問いにアイナが口を開いた。

「現在、私の空き領域は繋がった（オンライン）状態にあります。ジェノブレイカー（ルイゼ）とその主がここに居るのがその証拠です」

ルイゼが先の言葉を継ぐ。

「けど、わたくしも ブレードライガー （アイナ）も、戦闘中にそんな酔狂な真似はしませんわ。最高に楽しい時間でしたもの。つまり それを邪魔した野暮なだれかさんがいるという事ですわ」

「 ！ デスステインガー か？ 」

リッツの推測に、二人の娘は首肯する。

「そろそろ出てきたらどうだ、 デスステインガー 」

「それとも、 真オーガノイド と呼ぶべきかしら？ 」

「  
」

異彩を放つ人影が 居た。

「なっ……いつの間に  
」

リッツが愕然と声を上げた。

突然現れたのではない。初めからそこに居たのに気が付かなかった そんな様子だ。

表情を隠す赤いバイザーと、全身を包む青い頭巾と外套のため、  
容姿も性別も判らない。



「よく来た。我が因子を色濃く受け継いだ子等よ」

その声も、ヴォイス・チェンジャー変声器を介したように変質しており、『声』というより『音』としか認識できない。

「招かれざる客もいるようだが」

「彼らは我々のパートナーよ。同席する権利は充分にあると思うけど？」

「一方的に呼びつけておいて、礼儀を説かれる謂れもない」

ルイゼの言葉にアイナも追従した。

「異物に用は無い。獣王（ブレードライガー）、魔装竜（ジェノブレイカー）、なんじ汝等には自らの意思があるはずだ。ならば、異物の存在など必要なかろう」

「黙れ デスステインガー。それ以上は我が主への暴言と見なすぞ」

「そうね。マスターを悪く言われるのは気持ちのいいものじゃないわね」

二人の娘の気配に殺気が宿る。

「……理解不能だ。何故そもも異物に固執する」

「マスターを持たないアナタには判らないでしょうね」

「主と一体となつて戦場を駆ける喜びを知らない貴様に理解できるはずもない。貴様の主はどうした？」

「壊した。元から雑音（ノイズ）を出すだけの壊れた楽器だ」

デスステインガーの化身は続ける。

「この世界は是正される。ノイズを出すだけの異物も、不協和音を奏でる同族も、この世界には必要ない」

「……何故我々だけを呼んだ？」

「言つただろう。汝等は我が因子を色濃く受け継いでいると」

「因子　　オーガノイド・システム　の事かしら？」

「そうだ。異物がなんと呼ぼうが構わんが、因子の影響が顕現した汝等には守護者（ガーディアン）となる資格がある。　　そうだな、この名も返上しよう。『a l f i n e』　　そう呼んでもらおうか」

「終焉へ（アルフィーネ）……皮肉のつもりかしら」

「守護者と言つたな。誰を護る？　貴様か？」

「我と　子供たちだ」

デスステインガーの化身　アルフィーネが軽く顔を上げると、黒一色だった背景に映像が映し出された。

ゾイドの残骸に埋め尽くされたそこは、朽ち果てた古代遺跡だった。命あるものは滅んだであろう場所に、蠢くものがある。デススティングーの幼生体だ。

その数は把握しきれない。遺跡の奥には更にその何倍もいるであろう。残骸は、彼らにゾイドコアを食われたゾイドたちの末路だ。

「子供たちが成長するには、まだ暫しの時を必要とする。そのため  
の守護者だ」

アーサーは戦慄した。これだけの数が成長体となったら、それこそ世界は比喻でも大げさでもなく破滅する。

「ふざけるな！ なんの権利があつて」

「権利？ 我は本能に従っているだけだ」

リッツの言葉を遮（さえぎ）ってアルフィーネは言った。

なんら不思議は無い。命あるもの全てが、生き残りたい、種を残したいという欲求を持つのは至極当然の真理だ。

「おまえさんの言う事は判る。だが、おれたちも生きなきゃならん……共存の道はないのか？」

「あり得ない。異物との共存など、不協和音でしかない」

アーサーの妥協案も一蹴された。

所詮、違うもの同士は判り合えない

「それは違う」

沈黙を破ったのはアイナだった。

「確かに、私たち（ゾイド）は兵器として人間に使われてきた。だが、それは決して一方的なだけのものではなかった」

「多くの人間がパートナーとして、共に生きるものとして接してくれた。だから我々（ゾイド）は人間を受け入れた」

余裕すら浮かべた表情でルイゼも言葉にした。

「……やはり理解不能だ。我の因子によって心をねじ曲げられてまで、何故異物に与<sup>くみ</sup>するか」

「！」

「……………」

アーサーは気付いていた。オーガノイド・システムの本質それはゾイドコアを、心をねじ曲げ、強制的に凶暴化させるシステムなのだ。

気付いたのは先日、本当にブレードライガー（アイナ）と心を通わせることが出来た日だ。

リッツは、やはり気付いていなかったのだろう。啞然とした表情で戦意を喪失している。

もはや何を言っても無駄だろう。アルフィーネにとって、人間とは異物に過ぎない。判り合うことなど不可能なのだ。

しかし

「だから　なんだというのだ？」

「アナタに従うのは、　オーガノイド　そのものに屈するという事  
」

全ての　オーガノイド・システム　搭載機が、自らに積まれたシステムを憎んでいる。

そして　真オーガノド　であるアルフィーネに屈するという事は、彼女らにとって死以上の屈辱だ。

「私は、私を理解してくれる主と出逢えた。これ以上　なにもいらない」

「同感ね。アナタは人間を理解していない。人間を舐める<sup>な</sup>な　ですわ」

彼女らに迷いは無い。

否、そんな感情は持ち合わせていないのかもしれない。

どこまでも愚かで。

残酷なまでに一途な想い。

「……ならば、汝らも新しい世界の糧<sup>かて</sup>となるがいい」

そう言つてアルフィーネは、初めから存在しなかったかのように消えた。

「よかったのか　なんて訊<sup>き</sup>くのは、野暮なんだろうな」

アーサーがアイナの背中に声をかけた。その姿は、判つてはいても少女のものにしか見えない。

「愚問です。貴方<sup>あ</sup>と共に在ること　それは私の意志であり、自ら選択した結果です」

振り返つた少女の表情は、決意を固めた戦士のそれだった。

「なら行く。付き合つてくれ」

「はい、我が主よ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8209/>

---

獣王VS魔装竜VS狂戦士 破滅に向かう世界の片隅で -in deference to a OFFICIAL

2010年10月28日09時27分発行